

新しい葡萄酒は新しい革袋に

*並河良治



1. はじめに

表題は、キリストが話された喩えのひとつである。この喩えは、当時のユダヤ人たちは断食を励行していたのにキリストの弟子たちが断食をしないことについてユダヤ人が詰問した際の返答として語ったものである。この喩えの前には、古い外衣をまだ縮んでいない新しい布きれで接ぎ当てることはないという喩えが述べられており、それと並置されたものが表題の喩えである。わたしたちは、葡萄酒はビン詰めされているものを思い浮かべるが、当時葡萄酒は動物の皮を袋状に加工したものにしていたので、この喩えを聞いた人々は、新しい葡萄酒を新しい革袋に入れなければ、革袋が裂けて中に入れた葡萄酒も袋もダメになってしまうことを容易に理解することができたようである。この喩えは、イエスの新しい教えは旧来の習慣、考え方や体制で受け入れられるものではないという意味であると筆者は解釈している。この喩えを言い直すと、葡萄酒が新しいならば、それを受容できる革袋は新しいもの、となり、その対偶は、革袋が新しくないならば、それが受容できる葡萄酒は新しくない、となる。命題が真であれば対偶も真であるので、換言すれば、人々の習慣や考え方や価値観（葡萄酒）が旧来のままで受け入れられるや価値観（葡萄酒）は新しくない、つまり、人々は新しい価値観を受け入れられないことになる。しかし、人々の考え方が旧来のままでないとすると、新しい価値観が受け入れられる可能性が出てくる。

2. もののゆたかさかこころのゆたかさか

「パラダイムシフト」という言葉が巷間聞かれるようになって久しい。このパラダイムシフトというフレーズ、手垢の付いた感のある表現であるが、ここで言うパラダイムとは、科学歴史学者のトーマス・クーンが提唱した概念を拡大解釈した

もの、つまり「時代の枠組みを決める考え方」を意味している。従って、パラダイムシフトとは社会の価値観の転換として用いられている。

さて、内閣府が実施している国民生活に関する世論調査では、これからの生活において「物の豊かさ」を重視するか「心の豊かさ」を重視するかという質問が継続的にされている。この質問に対して「心の豊かさ」と回答した人の割合は、1972年の37%であったが、が1979年(昭和54年)には「物の豊かさ」と回答した人の割合を上回るようになり、現在では6割強となっている。今の社会を見て、物の豊かさよりも心の豊かさに重きを置いている人の方が多いように感じられないのは、私たちの「心の豊かさ」が物の豊かさを前提にしたものだからかもしれない。とはいうものの、人々の価値観が変わりつつあるようではある。この調査が真に人々の価値観を反映しているものであれば、パラダイムシフトの兆しが見えてもよいと考える。

今年の3月11日に起きた東日本大震災とそれによって引き起こされた福島第一原子力発電所の事故に対する人々の反応は、あるいはその兆しなのかもしれない。少なくとも東日本に住む人々は、以前のように何の制限もなく電気を使うことができなくなって、これまでのライフスタイルについて見直すきっかけが与えられ、それをある程度変化させることに対して抵抗なく受け入れているようにも見える。

しかし、これをパラダイムシフトと呼べるかは慎重に見極める必要がある。今や電力量の不足を如何に補い、日本の産業を維持・発展させるためのエネルギー源をどこに求めるのかという観点から検討が加えられることが主流であり、産業のあり方やどのようなライフスタイルを選択するのが望ましいのかという観点から論じられる機会が少なくなっているからである。

*国土交通省国土技術政策総合研究所道路研究部道路研究官

3. パラダイムシフト

パラダイムがシフト（変化）すると、すべての事柄に対する評価の尺度も変化するはずである。それは、理系と文系では入試科目が異なるのと同じである。共通するものもあるが、異なる観点で評価がなされる。英語は共通だが、一方は歴史や倫理社会で他方は物理や化学という科目が評価の対象になる。あるいは、英語の配点が異なり、一方では他方よりも重視されないかもしれない。これを電力供給に当てはめると、これまで経済性という尺度が重視されてきたが、パラダイムの変化によって、それとは異なる尺度が重視されるかもしれない。その尺度は、全く新しいものかもしれないし、歴史の中で重視されていたものかもしれない。どのような尺度かは分からないが、パラダイムシフトが起これば、これまでとは違った評価の尺度が重視されることは間違いない。

では、パラダイムシフトはどのようなときに起きるのであろうか。機会が与えられただけではパラダイムシフトは起こらないだろう。明治維新やさまざまな革命 — パラダイムシフトということができると考える — は、変化を望む抑圧された心の中のエネルギーときっかけを与える社会情勢の変化は必須のものと考えているが、それらだけでは起こらなかっただろう。パラダイムシフトは、新しい社会を築こうとする人々が示す新たなビジョンに進取の気性に富んだ人々が共感し、大きな流れとなって成就するものと考えている。

4. 土木技術に求められるもの

近年の土木の分野を取り巻く情勢と今回の災害を受けて、土木技術者の中でパラダイムシフトが生じているだろうか。土木分野、特に、公共事業は国民の福祉、つまり、国民の安定した生活環境を向上させるコトを目指して実施されている。この点は普遍的な目的と考える。しかし、その「安定した生活環境」を測る尺度をどのように設定するかという点は普遍的なものではない。たとえば、1990年代以前は地球温暖化への対応という評価軸は存在しなかったし、B/Cということもかまびすしく言われなかった。また、福祉を向上させる対象も変化する。個々の事業によって受ける便益は、人により、あるいは、時により異なる。従っ

て、どのような人々のどのような行動（コト）に焦点を当ててサービスを提供するののかという点は普遍的なものではない。この度の災害と事故は、私たちが土木技術者として、真に人々が望んでいるコト（サービス）はどのようなものなのか虚心坦懐に問い直す機会を提供してくれた。この機会に私たちは、土木技術を人々の福祉の向上を図るモノを作るための技術であるにしても、モノを作ることを目的とするのではなく、作ったモノによって、人々の生活の質を向上させるための技術として活用したい。その際、人々を十把一絡げとした集団ではなく個々の人々（すなわち、平均値のみならず、分散も考慮して）として意識すること、生活の中の既往の行動に加え、これまでなされていない行動も含め、生活にとって重要な行動（コト）の質を向上させるという目的を明確に意識してモノ（構造物）を計画し、作ることが必要と考える。加えて、これまでの価値観のみに基づいて取り組むのではなく、私たちが向かうべき社会の方向を具現することを旨とすべきことを提案したい。

5. チャレンジ(課題)

新しいコトに取り組むことはたやすくはない。皆と違うことを始めようとするといわゆる旧勢力との軋轢は避けられない。とはいうものの、最も大きな障害は自分自身にあることが多い。新しいコトは、私たちにとことん考えることを強いる。私たちは、概して考えることをめんどろうだと思ふ。考えることは、とてもコストがかかる。加えて、これまで通りのやり方で済ました方が心地良い。

表題のたとえをキリストは次のように締めくくっている。「古い葡萄酒を飲めば、だれも新しいものを欲しがらない。『古いものの方がよい』というのである。」

筆者は、新しい葡萄酒が何であるか未だ答えを見いだし得ていない。しかし、土木の世界に限定したことなく、社会全体としてこの時に新しい葡萄酒を見出し、日本発のパラダイムシフトが生じなければ、悲観的に過ぎるかもしれないが、エネルギーを大量に消費することにより利便性を追求する世界規模に広がるこの文明は、早晚立ちゆかなくなるのではないかと危惧している。